

---

# 真剣で幻が通る道

双六

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で幻が通る道

### 【Nコード】

N0019Z

### 【作者名】

双六

### 【あらすじ】

川神院に一人の男がやってきた。

その男、17歳ぐらいで、全身真っ黒の格好だった。

ただ一つ、その男の瞳だけが

アメシストの宝石のように、紫色だった……。

超、人見知りの男が歩く、摩訶不思議の通り道。

## 0章 設定（前書き）

まずは、設定です。

作者は小説というものを書いたことがありません。

更新日も未定で、

オリ主がチートのよくある小説だと思います。

よろしく願います。

## 0章 設定

設定

・黒峰 紫貴 (くろみね しき)

男

17歳

家族

黒峰 師禅 (くろみね しぜん)

親に捨てられ、5歳の頃師禅に引き取られる

最初の格好

黒髪

髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ

黒い羽織に黒い着物

靴は黒いブーツ

まああれです、イメージは空の境界で出てくる両義式が革ジャンの

代わりに羽織を着て全身黒色な感じですよ

瞳はアメシストの宝石みたいな紫色ですよ

特徴

・破幻の瞳

ぶつちやけ刀語でてくる見稽古の強化版

・・・チートですよ

・天性の武の才能

破幻の瞳をフルで使える身体能力、川神百代レベルですよ

・・・チートですよ

・人見知り

誰も信じてません、自分も

・戦いを行うのを嫌います

人間嫌いなのでそもそも誰かと一緒に行動したくありません

・人の言うことを聞きません

自分が認めた相手以外、最低限の事しか聞きません  
自分の気分で変わります

・社会不適合者です

社会に関心があまりありません

最初は今、生きていれればいいと思っています

・家事スキル

学べば一発でできますが、面倒なのでしません

・自分を大切にしません

リストカットや自殺といった自分から体をいじめる行為はしないが  
怪我をしても血を止めて終わりです

自分は居ても居なくてもいいと思ってますが、育て親の師禅が  
注意していたので、今のところ死のうとは思っていません

しかし、生きたいとも思っていない

・学びたい

自分が知らない事、理解できない事を知りたいと思います  
これも自分の気分しだいです

・武術家ではありません

師禅に鍛えられたが、武人とは、など

なぜ武術家とならねばならないのか理解できないし  
進んで戦おうとしないので、武人と思っていない

チートがいっぱいです

作者は小説という物を今まで書いたことがないので

オリ主のスキルがチートじゃないとなにもできません(笑)

温かい目で見守って下さい

後、タイトルの

真剣で幻が通る道

特に意味は無いです

主人公が幻のような人物だなあと  
フツと思いつながら付けました

更新日は決まっています

どのように物語が進むか作者もわかっていません

## 0章 設定（後書き）

はい、駄文ですね、  
また説明を入れると思います。

## 1章 男と川神院（前書き）

はい、一話目です

駄文で、文才もからっきしですが

どうか温かい目で見守って下さると  
ありがたいです

## 1章 男と川神院

・・・侍・・・

それはもう消えてしまったもの・・・

しかし侍が抱いた武士道は、力と美の象徴として今での日本人の心に深く刻みこまれている・・・

現在、日本では武家屋敷や武道家が数多く存在する・・・

しかし・・・遙か昔、侍がいた頃と比べると現代は大きく違う事があつた・・・

それは、女子が圧倒的に強いということ・・・

これは武家娘や武道家、色々な力を持つ者が多く通う、学校生活の物語

ここは川神院、関東三山の一つで、厄除の寺院として名高くそれが市の名前になるほどだという院。そして『己を高め気力で厄を祓う』という考えのもと、武道の鍛錬を行う場所として有名である

その場所に一人の男がやってきた

その男、歳は16〜20ぐらい、髪は黒髪で髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ、黒い羽織に黒い着物、靴は何故か黒いブーツ、黒い布袋を持っていた

つまり全身真っ黒なのである

ただ一つ、瞳の色だけが違っていた・・・アメシストの宝石の如く、紫色なのである

男はそのまま、川神院に入ってしまった

門をくぐると、川神院の門弟が立っていた

「本日はどの様なご用件で？」

すると黒い着物を着た男は

「・・・川神鉄心・・・居る？」

すると門弟は目を細め・・・

「・・・失礼ですがご用件は？総代との試合を望むならばまず総代の孫にあたる川神百代殿との手合わせが決まりとなっておりですが・・・」

すると着物の男は静かに首を横に振ると布袋から一枚の手紙を取り出し

「・・・居るなら・・・これ渡して・・・」

と門弟に手紙を渡した。手紙を受け取った門弟は

「・・・少々ここでお待ちを」

そう言つて門弟は男を残して素早く室内に入つて行つた

少しの間、男は川神院の建物を眺めていると、

「・・・ああ、この雰囲気、俺には合わなそうだ・・・ん？」

ぼんやりと建物を眺めていると後ろから人の視線を感じ静かに振り返ると、

黒髪のロングヘアの女が一人、門のところまで男を見ていた。

「お？着物を着ているから女だと思つたら、男じゃないか。しかしなんだその格好？葬式の返りか？誰だお前？挑戦者か？」

男は無言で女を上から下にゆっくりと眺めると、興味を無くしたかのようにまた、前を向いてしまった

「むっ、おい無視するなー、てゆうかこっち向けー」

女はそう言つて男の肩に手を置こうとして・・・空をきる

「・・・触るな、お前に用はない、消える」

女の隣で男は女を見ずに答える

女は少しの間、茫然とした後、顔をにやけて男をみる

「つれないことをいうなよーお前なかなか強いだろ？勝負しろ！最近挑戦者が来なくて退屈だったんだ」

女は新しい玩具を見つけた子どものように笑いながら男に話しかける  
「・・・消える」

男は女に冷たく言い放った

「私は川神百代、次期川神院総代だ、お前名前はなんていうんだ？」

「お前はなにか武道をするのか？身のこなしが素人じゃないぞ」

「・・・・・・・・」

「お前の流派は？武器は？どの位強い？」

「・・・・・・・・」

「なーなー無視するなよーこんな美人なお姉さんがはなしかけてるんだぞー相手しろー」

「・・・・・・・・はぁ・・・ウルサイ奴だ、消えろと言っている」

男はため息を吐きながら女を見ずに答える

「やっと返事をしたと思っただらそれかー冷たい男は他の女に嫌われるぞー」

百代はふてくされていような顔をつくり、男に話かける

「・・・・・・・・じゃぁ嫌いになっただろ？・・・消えろ」

男は百代の方を向くが顔は川神院の方を見たまま答える

「他の女は、と言っただ、私は違うぞー、むしろお前に興味がある。勝負しろー」

「・・・・・・・・俺は興味がない、だから失せる」

男の返事に百代は、

「そんな冷たい事を言う奴にオシオキが必要だ・・・なっ！」

百代は男の顔面に向かっていきなりパンチを放った。だが男は、

「・・・・・・・・ひよい」

男はその場から一步も動かず、首だけを動かし飛んできたボールをよけるように百代のパンチをよける

「あはっ、これを簡単によけるか、何者だ？お前？最近の挑戦者はこれで大抵終わるのだからなあ」

「・・・・・・・・なんの真似だ？」

男は一段と機嫌が悪くなり、目を細めて百代を見る

「やっと私を見たな、そしてこの実力、期待通りだ、ますます興味

がでてきたぞ」

百代は男の強さにますます期待し、笑顔で男にはなしかける

「・・・いきなり殴りかかってくるような奴が次期総代だと？本当にここがあの話で聞いた川神鉄心が居る川神院か？」

男がぼそつと呟くと、百代は首を傾げ、

「なんだお前、ジジイにようがあるのか？・・・まあそんなことよ  
り私と勝負だ！」

百代の反応に男は呆れながらはなしかける

「人の用事をそんなことつて・・・はあ、勝負勝負つて餓鬼を相手にしてる気分になってきた」

男の返事に百代は頬を膨らませ、

「餓鬼つてなんだ餓鬼つて、こんな美人なお姉さんを捕まえて」

「捕まえてない、むしろこっちが捕まっているんだ」

「いいから勝負しろーこんな美人の相手をするのになにが不満なんだよー」

「・・・全部、第一こっちにメリットがない・・・」

男の答えに百代は首をガクツと落としたが、なにかを思いついたかのようにまた顔をにやけて、

「全部つて・・・ん？ということはお前にメリットがあるなら私と勝負するんだな？」

男は後で後悔をする、百代の強さにはない、

どうしても少し百代というものに考えを働かせなかったのかを・・・。

## 1章 男と川神院（後書き）

はい、ありきたりですね  
オリ主の性格が今後の作品で  
変わっていくかもしれませんが  
そこはご了承ください  
ではまた会いましょう

## 2章 男と武神（前書き）

早くもどう書いていいか  
わからなくなってきた・・・

## 2章 男と武神

黒い男から手紙を預かった門弟は川神院総代であり川神百代の祖父にあたる、川神鉄心の部屋に向かっていた

その頃、鉄心は

「はあ、最近のモモには困ったもんじゃのう、強い者と戦いたい戦いたいと最近はそればかり言いおつてからに…最近は何が強くなつて抑えが効かんようになってきたしのう…ワシが相手になるかそれとも武道四天王に頼みを送るか、しかし最近のモモでは相手にするのモキツくなつてきたしのう」

鉄心は部屋で戦いに飢えている孫の心配をしていた、そこへ扉からノックが聞こえる

「総代、今大丈夫でしょうか？」

「ん？よいぞ、入んなさい」

扉から院の門弟が入ってくる

「どうしたのじゃ？」

すると門弟は手紙を渡し、

「今、門の入り口に全身真っ黒の格好をした着物の男が総代はいるかと、見るからに怪しかったので要件を聞くとこの手紙を渡してほしいと、名前は言つてこなかったのですがいま入り口に待たせております。」

門弟から手紙を受け取った鉄心は手紙を見て、

「はて？黒い着物の男？その様なものが知り合いにおつたかのう？」

鉄心は手紙を読み始めしばらくすると急に驚き始めた

「なんじゃと！」

急に大きな声を出した鉄心に驚いた門弟は

「ど、どういたしました！総代！？」

手紙を読んだ鉄心は慌てて

「こつこの手紙を持ってきた男の眼は！瞳は何色じゃった！今、門

に居るのじゃな!？」

鉄心の慌てように驚きながら門弟は

「はっはい!今門の入り口に、瞳は……そういえば紫色でしたね」  
それを聞いた鉄心は

「早くここに……いやワシが迎える、男は門じゃ ドン!!  
!……なんじゃこの爆発音は!……この氣はモモか!?……  
場所は院の入り口じゃと!まさか!？」

爆発音を聞いた鉄心は急いで門へと急いだ、

爆発音の少し前、門の入り口では、黒い着物を着て紫色の瞳を持つ  
た男と川神百代が居た

「私と戦う……メリット……金?……いや今は借金中だし……  
食べ物……いや、そこまでの物は作れない……」

百代は腕を組んでぶつぶつと男と勝負をしてもらうための条件を考  
えていた、その頃男はというと

「……遅いな、あの門にいた奴、ちゃんと川神鉄心に手紙を届け  
たのか?……勝負しか言えない餓鬼みたいな女が考え込んでいる  
うちに早く来てくれ……面倒事になりそうだ……」

無言で鉄心の到着を待っていた

「うん……はっ!!そうか、よし!」

なにか閃いたかのように百代は男の近くに歩いていく

「よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが  
相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える……どう  
だ?」

百代が男のメリットを言うと男は、

「……はあ、まあいいか……引き分けの場合と時間制限は?」  
男がけだるそうに百代に質問する

「時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持た  
ないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負  
けでいい!」

百代は子どものようにウキウキしながら説明を行う

「・・・本当にそれでいいのか？」

百代は

「ああっ！さあ勝負だ！今勝負だ！すぐ勝負だ！」

とても嬉しそうだ

男は

「はあ、・・・なんで俺なんかと勝負したがるんだか・・・」

すでに疲れていた

「私の武道家としての勘が言うのだ、お前は今までの会った同い年

ぐらいのどの男よりも・・・強いと！強敵だと！」

百代は今まで自分が行ってきた勝負を思い出しながら答える

「・・・知るか、お前の勘もお前の知り合いも」

まあごもつとも、である

「・・・ふう」

百代は2、3秒目を閉じ、開くとそれはさっきまでの子どものような百代から川神院の武神、川神百代になっていた

「・・・！・・・とつとと終わらせるぞ・・・」

男は百代の様子が変わったことに気がついた

「川神流、川神百代、武器は素手だ」

百代は相手にお辞儀を行い構える

「流派・・・秘密、匿名希望、武器は・・・なしでいいや」

男は軽く頭を傾けた後、だらんと構えずに立っている

「おい、なんだそれ？名乗る意味ないし構えないって・・・」

「・・・文句は勝負中だから言え、殺してもらってもかまわん、知りたい事は願いでいいな、時間がおしい」

男が言うと百代は黙り、また構えなおす

「それじゃあ・・・始め！」

そう叫ぶと百代は男めがけて強烈な突きの連打を放った！  
だがしかし

「・・・」  
「フッフッフッスッシャ

男は無言で百代の突きを目で追いながら避けていた

「アハハッこれが掠りもしないか！いいぞ思った通り・・・だ！」  
百代は数の攻撃を止め、速さと重さを込めた一撃を放つ

「・・・おっと！」

男は後ろに跳び、攻撃を避ける

「おいおい、今のは揚羽さんでもあたるぞ、本当に何者だ？お前？  
なぜここまで動けて私に名前が届いてこない？」

「・・・」

「これが・・・次期総代か・・・そこいらの武術家とはレベルが違  
うな、あの人以上だ・・・」

着地した男は考え事をしながら百代を見ていた・・・百代だ  
けを

それを見逃す武神、百代ではなかった

「勝負中に考え事か！！川神流無双正拳突き！！」

「・・・！？」

とつさに百代の攻撃に気がつく男、しかし百代だけを見ていた為、  
自分がどこに立っていたかまでは気がつかなかった・・・背のすぐ  
後ろに門の壁があることに・・・

「！？しまっ」 ドカン！

壁を背にした男に百代は正拳突きを当てる

「ふふふ、衝撃の逃れない上での無双正拳突き、想像よりも劣った  
が、四天王でもこれでおわ・・・！？」

勝ちを確信する百代・・・その時見てしまった、今まで味わった事  
のない死のイメージ・・・

自分を死へと誘うであろう、紫色の瞳を・・・

## 2章 男と武神（後書き）

自分で読んでも下手ですね〜

駄文、乙です

暖かい目でおねがいしますねw

### 3章 男と武神 決着（前書き）

はい なんか早くもおかしくなってきました

### 3章 男と武神 決着

男に向けて、会心の無双正拳突きを当てた百代、勝ちを確信したがその時、見てしまった、相手の瞳を、その時感じた恐怖、自分に流れる死のイメージ、・・・殺される！

そう思った百代は無意識に動いていた、放ってしまった、・・・  
・ 禁じ手を・・・

「!? ひっ！富士砕き!!!」 ドン!!!  
コンクリートでできた門の壁を砕き、男は吹っ飛んでいく

・・・男は転がる、20mぐらい先を、そして動かなくなった  
少しして正気に戻る百代、その時気がつく、自分が何をしたのかを・

次第に百代は段々と青ざめていく、

「わ・・・私はなにを・・・さっきの一撃で勝負はついていたのに・  
・・・こ・殺してしまっ・・・た？」

その場で立ち尽くす百代、そこへ鉄心が走ってきた

「なっなんじゃこれは!?! どういう訳じゃモモ!! 説明せえい!」

そこで百代は鉄心に話す、青ざめながらゆっくりと、男に出会ってからのやり取り、決着がついてからの富士砕き、自分に感じた悪寒と・・・相手を殺してしまったかもしれないことを・・・

「と・・・とにかく彼じゃ! モモ! すぐに川神院の救護班を・・・!  
?」

そこで鉄心は止まる、ありえないものを見たように

「ああ! すぐに連れて・・・? どうした? ジジイ?」

百代は鉄心が茫然としているのに気が付き、鉄心が見ている先を見て止まる、その見た先には男の死体はなかった。その変わりにいたのは

「・・・痛い、それよりも一大事だ・・・服が」

自分の体よりも百代の攻撃により、ボロボロになってしまった着物を気にしながらこちらに歩いてくる男だった

それに気が付き、喜びのあまりに男に抱きつこうと飛びつく百代  
「良かった！無事だったか！」ひよい「あぶっ!？」

男によけられ、地べたに転がる百代、男は百代を見ようとせせず、鉄心の前まであるいていく

「・・・あなたが・・・川神鉄心？」

ボロボロの男に話しかけられ正気に戻る鉄心

「あっああ、いかにも、ワシが川神院総代、川神鉄心じゃ・・・おぬしが手紙に書いてあった・・・」

自己紹介をして、話そうとする鉄心、そこで頭の中で？がでる、そして・・・

「いやいや！？そんなことよりもお主！？大丈夫なのか？体は!？」  
平然と話す男を見て、さっきの百代の話を忘れていた鉄心、自分の紹介をし、手紙の事を思い出した鉄心は男に慌てて聞く

そこへ男によけられ、納得いかない顔をしながら歩いてきた百代が話かける

「・・・普通よけるか？こんな美人のハグを？・・・まあいい、そうだお前！体は!？」

二人の問いに男は

「・・・ああ、問題ない」

男の答えに、ほっと安心する二人、しかし

「・・・腹と背中に激しい痛みと内出血、左腕の骨が折れて、アバラ骨の数本にヒビが入ってる、そして着物が死んだ・・・ぐらいだ」  
男は自分の体を確かめるように見ながら、傷の具合を告げる

「「いや!？それは問題しかない(だろ!・・・じゃる!)」」

男の問いに二人合わせてつつこみをいれる

「なんで平気そうな顔してるんだ!？お前!??」

慌てながら男に問いかける百代、男は

「・・・それよりも・・・ごほっ・・・訂正、・・・臓器も傷ん

でた・・・」

ごぼつと吐血し、地面に落ちた血を見ながら男は答える、そして・

「・・・あ、まずい」

どさつと男はその場にゆっくりと倒れた

その場に倒れ、動かなくなった男を茫然と見ている二人、そして

「・・・っ!? わぁー! ジジイ! 救護班!」

「・・・!? そ、そうじゃ! モモ早く彼を部屋へ! 話はあとじゃ!  
!」

二人は大慌てで動き出す、百代は男をかついで建物の中へ

鉄心は急いで救護班の所へ走って行った

男を担ぎながら走る百代、走りながら男を見て、百代は

「それにしてもこいつは本当に何者なんだ? あの様子からじゃ全然本気じゃなさそうだったし・・・それにあの時のこいつの目・・・殺されるかと思っただぞ、」

腕の中で眠っている男を見て、百代は考える

「・・・勝負は私の負け、もっと長引く予定だったのに、まあいいか、さてこいつは気がついていいるかな? あのメリットのはなし・・・これから楽しくなりそうだよ」

百代はにこやかに笑っていた

そうして百代は男を担いで、男を休ませる部屋へ走って行った

「その男はモモが部屋に連れていっている、頼んだぞ」

「はい! 総代!」

救護班に指示をだし、救護班を部屋に向かわせた鉄心は男がいる部屋へと歩きだす

「彼が本当にあの手紙の通りなら、あるいはモモの渴きを癒せるかもしれないの・・・さてはて、これからどうなるのかのう? 楽しくな

りそつじやわい、彼が起きたらまずは話をせんとつて  
ホッホッホと鉄心は歩きながら男のもとへ歩いて行った

### 3章 男と武神 決着（後書き）

一体、この小説はどこに向かうのか…  
それは誰にもわからない（笑）

#### 4章 男の正体（前書き）

やっとオリ主の名前公開ですわ

主人公の名前が出てくるのが4話以降って

ありえないっすね〜

## 4章 男の正体

「ジジイ、説明しろよ、なんなんだこいつは？なんで私と同じ歳ぐらいである実力の男が私の耳に届かない？間違いなく四天王クラス…いや、私レベルだったぞ？」

「なんじゃいモモ、その口のきき方は、お前は次期総代としてのだな…」

「だまれジジイ、話をごまかすな」

勝負の後、救護班の治療を終え、布団で眠っている紫色の瞳を持つ男、その横で川神鉄心と川神百代は言い合いをしていた

「はあ、なぜこう育ってしまったのかのう…まあいい、この男の事はワシも詳しくは知らなかったのじゃ、しかたなかるう」

「ジジイでも知らなかったって、どういうことだ？この男はジジイに会いにきたのだろうか？」

百代が頭の上に？をだしていると、鉄心が懐から手紙を出して、百代に渡す

「ワシの知り合いの所で育っていた子でのう、その者から手紙を持ってきたのじゃ、名前は黒峰紫貴くろみねしき、詳しくはこの手紙を読んでみ、後はこやつから話を聞かんことにはのう…」

「黒峰紫貴か…手紙ねえ…」

そう言つて百代は手紙を読みだす、手紙には

『黒峰師禪くろみねしぜんより川神鉄心へ

久しいの鉄心、こんな手紙で許してほしい

お前には、言っていないかったが、私は病にふせておつての、自分の体のことだそう永くは生きられん、その前にどうしてもお前に頼みたい事があるのだ

私が引き取つて育てている紫貴、黒峰紫貴の事だ

私が死んだ後はこの手紙を持って川神市にある川神院、川神鉄心、私の親友にこの手紙を届け、鉄心の言うことを聞くように言い聞か

せてある

紫色の瞳をしている子だ

本当に勝手だと私も思う、しかし鉄心、もしも本当に私の事を親友だと思ってくれているのならばどうか頼む、

あの子を見守り、育ててあげてほしい

あの子には少々厄介な事があつての、今の今まで他人と接する事ができず、

自分から他を遠ざける節がある

私もあの子を引き取ってから、あの子に認めて貰うのに数年かかった……

あの子は可哀そうな子だ、人の温もりを知らん

もし一人で生きていくような事になれば、一生を孤独に終えるだろうあるいは自分で終わりにしてしまうかもしれない

あの子は自分を大切にせず、ないがしろにする癖がある

これも認めて貰った後から少しずつ直していこうと努力したが私では最後まで直してあげられなかった

話が長くなつたな、私もまとめるのが下手だな

あの子は頭がいい、良すぎるんだ

あの子は学ばせようとした事はすぐに覚えるし、自分の知らない事は知ろうとする欲もある

けれども心はまるで空だ、私では満たしてやる事ができなかった  
どうか頼む、あの子を助けてあげてくれ

あの子の事だけが心残りだ

勝手だと分かっているがあの子を、紫貴を頼む  
信じているぞ、親友

私は先に行く、あつちできつと見守っていると紫貴に伝えておくれ  
ではさようなら、鉄心、私の唯一無二の親友よ『

手紙を読み終えた百代は布団で眠っている黒峰紫貴を見る

「……………」

彼女も理解できる所があるのだろうか

今の仲良しグループ、風間ファミリーや

義妹の一子が居なかったらと…

「…私は今の皆がいなかったら、今の私ではいられなかっただろうな…」

で？ジジイ、こいつの事はどうするんだ？」

百代は真剣な顔つきになり鉄心に問う

「むろん、親友の頼みだ…いや、そうじゃなくてもこやつはほっとけはできん

こやつの目をみたらすぐにわかった、孤独で他を信じられん目じゃ」

鉄心の答えに満足したのか、百代は肩の力を抜いた

「まあ詳しい話はこやつが起きてからじゃな」

そう言つて鉄心は部屋から出ていった

「…そういえばこいつの力のことや目のことは手紙にかかれていなかったな、ま、起きたらこいつに聞けばいいか」

百代はじいと紫貴の寝顔をみていた

「…この手紙の事はモモには時期がくるまで黙っておくとしようかの」

鉄心は懐から百代に渡したものの他にもう一枚、違う手紙をだして呟いていた

『追伸、

鉄心、もし私の頼みを聞けない事があるならこの手紙は見ずに処分しておくれ』

折り畳まされた手紙にはこう書いてあった、中には

『鉄心、ありがとう

お前には迷惑をかける

あの子を育てる上で知っていて欲しい事を書いておく、他言は無用だあの子を引き取ったのはあの子が5歳の時だ、あの子はとある村の子での

私が出会った時、あの子は瀕死だった

親はいなく、捨てられたらしい、村人からは鬼子と恐れられ、村人から暴力を受けたり、遠ざけられたりしたようだ

理由はあの子の目だ、アメシストの宝石のように綺麗な瞳だろう？

私はあの瞳に、破幻の瞳、と名付けた

どうやらこの目は一度みたものを覚え、簡単な事なら自分で真似できてしまうようだ

見る回数が増えればそれは確実になり、応用すらできるらしい

・・・おそらく、子どもでは出来ん事を出来てしまふあの子に恐怖し、

親はあの子を捨てたのだろう

村でも気味悪がれ、あの子を恐れ、鬼子、と化け物のように扱われていたようだ

おまけにあの子には天性の武の才能があった

あの子を引き取り、認められてからは、あの子を鍛えた

するとどうだ、あの子は15にして私を超えてしまった、信じられるか？

歳を取ったとは言え、若きころはお前にも対等に戦えた私をだぞ？

・・・恐らくあの子は今のお前よりも強い

私は嬉しかった、あの子がどんどん強くなっていくのが、

だが同時に恐れもあった、あの子は人を信じず、今は他を避けるだけだが

もし、他の者を敵と認識し、恨み、社会と敵対することがあるなら

あの子を止められる者がいるのか？と

今までは私がいた・・・しかしこれからは違う、私も永くはない

あの子には信じ合える友が必要だ

あの子を導いてあげて欲しい、頼んだぞ』

そう書いてあった

・・・しかし東の武神、西の武帝と言われ、若き頃はワシと同じ師のもと

切磋琢磨しワシと互角だった師禅を超えた子か・・・そうじゃモモと同じ川神学園にいれるか？あそこなら紫貴を気味悪がる奴もいないだろうし、モモの欲求不満も収まるやもしれん」  
鉄心はそう考え、歩いていった

「・・・あわよくばモモとくつつかんのう、ホッホッホ」

#### 4章 男の正体（後書き）

うん

こんな感じでもいいのかね…

いつになったら学校の話にいけないのか…

## 5章 紫貴と百代（前書き）

退避く退避く

キャラ崩壊おこしてるよー

## 5章 紫貴と百代

「……………」  
現在、紫貴は状況がよく理解できていなかった

「…整理、開始…」

「体中が痛い、これはあの女の攻撃が当たったから、理解、可能」

「体中に包帯が巻いてある、あの後手当をされたのだろう、理解、可能」

「布団で俺が寝ている訳、あの後自分が気絶したから、理解、可能」  
「自分の服装が変わっている、治療の為、着替えさせられたのだろう、理解、可能」

ゆっくりと状況を整理していく紫貴、そして自分の横を見る

「……………」なぜ、この女が同じ布団で眠っている？理解、不可能」

そう、百代が紫貴の布団と一緒に眠っていたのだ、しかも紫貴の腕に抱きついて

「…これは添い寝？なぜ？俺は凍傷になった訳ではない、添い寝をされる必要がない

むしろ邪魔だ、寝ずらい」

はたから見たらとても羨ましい状況なのだが、一般男子からとてもかけ離れている紫貴、照れる、恥ずかしいといった事にはならず、ただ純粹に迷惑していた、そこへ

「お姉様～お客様起き…」

ノックもせず、赤髪のポニーテールの女の子が部屋に入ってきた  
そこで紫貴と自分の姉が同じ布団で寝ているのに気がついた

「／／／／ひゃうっ！失礼しました！？／／／／」

なにを勘違いしたのか赤髪の女の子は顔を真っ赤にして大慌てで部屋から出ていった

「……………」なんだっただ？」

？マークしか出てこない紫貴、そんな中、騒ぎに気が付き百代が起

きる

「…ん？…ああ起きたか紫貴、どうだ？お姉さんの腕の中でいい夢は見られたか？この果報者め」

百代はいまだに紫貴の腕に抱きつきながらニヤニヤして話しかける

「…理解不能、これのどこに幸せを感じる要素がある、むしろ寝ずらい」

真顔で答える紫貴、照れてる素振りもない紫貴に百代は呆れた顔になる

「おいおいこんな美人のお姉さんに添い寝をされるなんて、普通は願っても叶わない事なんだぞ、紫貴は嬉しくないのか？」

「…意味がわからない、普通に叶わない事を願っていない者にするな、そもそも…まて、なぜ俺の名前を知っている？」

会話をしている紫貴は百代が自分の名を当たり前のように呼んでいる事に気がついた

「本気で言ってるぞ、こいつキャップと同じタイプか？…あ、あ？名前？お前が持ってきた手紙に書いてあった」

百代の話聞いて、紫貴は川神院に来た用事を思い出した

「…手紙…そうだ川神鉄心に会わなくては、おい女、離せ」

起き上がるうとしても百代が腕を掴んでいるので起き上がれない、振りほどこうにももう片方の腕は折れていて使えない、片腕では百代を振りほどくことができなかった

「女じゃなくて私は百代だ、百代と呼べ、それにお前はボロボロなんだぞ？まだ寝てる」

どうしても腕を離さない百代、しかたがないのでそのままにいる

「…寝ずらくて寝られるか、そもそもお前が「百代」…おま「百代！…お「百代だ」…百代の攻撃でこうなったんだろ？まあ勝負を受けた以上文句はないが…とにかく腕を離せ…」

「…お「百代だ」…百代の攻撃でこうなったんだろ？まあ勝負を受けた以上文句はないが…とにかく腕を離せ…」

足したのか百代は紫貴の腕を離した腕を離されたことを確認し紫貴は体を起こした

「…そもそもお前とは「百代」…はあ、百代とは勝負をしただろう？なぜいまだに俺に関わる？」

「それは私が紫貴の事を気にいったからだ！紫貴！お前、私の舎弟になれ！！」

百代は紫貴の腕を離れた後、布団から出て立ち上がり、腕を組んでそう言った

「……………」

しーんとなる空気、珍しくポカーンとなる紫貴、そして起き上がり

「…さて、川神鉄心と話にいくか」

部屋を出ていこうと部屋の出入り口に向かって歩きだす

「おい、無視するなよ」

紫貴の襟首を掴み、ふてくされる百代

「…離せ、意味がわからない、なにが悲しくて百代の舎弟にならなくてほならない」

もがく紫貴、ボロボロの体で力がでないのか、一向に抜け出せない当然である、百代の本気の奥義と禁じ手、そこらへんの武人なら即死、武道四天王でも2〜3日は起き上がれないだろう。それをわずか半日で歩きまわっているのだ

はつきりいつて、紫貴がおかしいのである

「ハハ、もうそこまで動けるのか、本当に面白いやつだなお前は、ますます気に入った！なあシキ、私の舎弟になれよ」

せっかく手に入れた自分の癒し相手を手放さんと、がっちり掴んで離さない百代

「アハハハ…そういうえばシキ、お前、勝負の時の約束、覚えているか？」

百代のその言葉にピタツと止まる紫貴、それを確認した百代は紫貴の襟首を離れた

「…約束？…ああ、メリツトのことか？」

百代の言葉を確認するため、百代のほうを向く

「ああそれだ、勝負の判定はどうなったのかわかってるか？」

百代の言葉に百代との勝負の前のやり取りを思い出し、結果を思い出して答える

「…たしか百代が言った言葉は、『時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!』…だったな、あれは俺が気絶したのが勝負を初めてから10分は過ぎていたから俺の勝ち…でいいのか?」

紫貴が確認の為、百代を見る

百代はにこやかに答えた

「ああ!あれは間違はなく私の負けだ!それにしても本当にお前は頭がいいな、私の言葉を一言一句違わずにそのままだ」

百代の態度になにか違和感を覚えながら紫貴は答える

「…なぜか俺は餓鬼の頃から記憶力はいいんだ、大抵の事は覚える…まあほとんど聞かないようにしているが…なぜ百代は負けて嬉しそうなんだ?」

そう、百代はとても嬉しそうだ、まるで悪戯が成功した子どものように…

「そこまで覚えられているのなら、メリットの事も完璧に覚えてくれるだろう?」

完璧、その言葉をやけに強調して話す百代、そして紫貴は少し下を向いて思い出す

「たしか百代の言葉は…『よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える』…!?!?」

その言葉を言い終わると紫貴は真っ青になる

そう、負けたほうが、相手に願いを言う…

負けた百代が勝った紫貴に願いを言う…

たしかに自分は了承してしまった、

自分からこれでいいのか?と聞き、百代は了承した

その約束のもと、自分と百代は勝負を行ってしまったのだ

やってしまった、いくら面倒だからと適当に答えて、進めてしまった  
紫貴は自分に対して呆れてしまう  
その紫貴の顔を見て、百代は  
最大の悪戯を成功させた子どものように  
とても、にやけていた

## 5章 紫貴と百代（後書き）

百代さんがキャラ崩壊おこしています…  
自分の文才のなさを恨みます  
自分の頭の中で考えたものと  
書いたもの、  
少しづつ違っていくんだよなー

## 6章 紫貴のその後（前書き）

百代さんがなかなかのカオスに…

見事なまでにキャラ崩壊…

百代ファンの皆様

すみませんでした…

しかしこれからこういったキャラ崩壊が続くかもしれませんが  
なんせ自分、文才ないですから…

キャラの個性がなくなるかもしれないませんが

そこはご了承ください…

## 6章 紫貴のその後

「……………」

「……………」

「……………」

ここは川神院、川神鉄心の部屋、現在部屋には、川神院総代、川神鉄心

その川神鉄心に手紙を届けにきた紫色の瞳を持つ青年、黒峰紫貴そして、武神といわれ次期川神院総代と言われている、川神百代

・・・現在、紫貴の腕にしがみついて、ご機嫌である

「…これはどういう事じゃ？」

現在の状況にまったくついていけない鉄心

当然である、黒峰紫貴が起きたと聞き、

部屋に百代と二人で来るよう指示をだし、そして二人が部屋に入ってきた

これまではいい

鉄心がわからないのはその後だ

心なしか疲れた顔をしている紫貴

これもまあわかる、あの百代と戦った後なのだから

おかしいのはその百代だ

あの風間ファミリー以外の男には、関心がまっただくなかった百代が今日初めて出会った紫貴の腕にしがみつき、一向に離そうとしないのだ

おまけにかなりの上機嫌なのである

「…紫貴君、モモはなぜ、紫貴君の腕にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、百代にしがみつかれながらも、気にする素振りをせず

黙って立っている紫貴に問いかけてみる

「……………知らん、本人に聞いてくれ、俺もよく理解できていない……………」

「どうか、出来ればコレを外してくれ・・・」

横目で百代を見て、コレ扱いをする紫貴

「…モモ、なぜ、紫貴君にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、紫貴の腕にしがみついている自分の孫娘に質問を行う

「シキは私の弟になったのだ！だからこれは姉弟のスキンシップだ

」

「……………」

ますます状況が読めない鉄心、頭の上の大きな？を出している

「…どうやら俺は先ほどの勝負の結果、百代の舎弟…になったようだ」

話が進まない判断した紫貴は、鉄心にそう告げる

そう、それは紫貴が目覚めた後、百代とのやり取りの結果、そうならしい

少し時間が戻る

「という訳で勝負に負けた私の願いを、勝ったシキが叶えなくてはならない」

百代が紫貴にそう言っている

「……はあ、納得いかないが、自分で承してしまった事だしな…で？俺は何をすればいい？川神百代」

紫貴はなにかを諦めたように百代に返事を返す

すると百代はまた笑顔になり

「だ〜か〜ら〜シキ、お前は私の舎弟になるんだ！」

百代は自分の胸の前で腕を組み、そう答えた

「…舎弟【シヤテイ】、意味はたしか自分の弟。実の弟。また、弟分。他人の弟。…つまり黒峰紫貴が川神百代の弟…義弟【ギテイ】になり、川神百代と姉弟【シテイ】になる…で、いいのか？」

紫貴はまるで辞書を読んでいるように確認をとる

「ああ！まあそういう感じだ、少し固いがまあいいだろう、今、ここからお前は私の二人目の弟だ！」

百代の言葉に紫貴は違和感を覚える

「…二人目？おい姉・百代、お前には他に弟がいるのか？」

紫貴の問いに百代は

「うーん、固いなあ、ほらシキ、姉さんとかお姉ちゃんとか姉上とかモモ姉とか言ってみろ」

紫貴の質問に答えず、百代はワクワクしながら紫貴に呼んでほしい自分の名を紫貴に喋りだす

「……質問に答える、愚姉【グシ】百代」

「いや！それはないだろ！？スマン！それだけはヤメロ、頼むから」

「……………」

「…シキ？」

「…」

「怒ったの…か？」

「…」

「……………あ！そうか弟のことだな、ああ！シキの他にもう一人だけ舎弟がいる、大和だ」

「…大和？」

「ああ、直江大和、シキと同じ歳で頭が切れる、ファミリーでは軍師を名乗っている」

「…ファミリー？百代の家族のことか？」

「…最終的に百代になってるし…「愚姉？」ああ！？スマン！ファミリーだな、いや違う、家族のようなものだが、風間ファミリー、私の仲間だ」

自分の弟になったものにいきなり嫌われないよう、慌てながら答える百代

「…そうだ、今度シキにも紹介するぞ風間ファミリー、舎弟の大和や皆にもシキを紹介しなきゃな！あそこに入ればシキも少しは人付

き合いも…」

「必要ない」

「…なんでだ？」

百代のファミリーや大和を紹介するという提案をスッパリと切る紫貴

「百代の舎弟にはなったが他の舎弟と関わるのは別の話だ、他の人間と基本関わる気はない…さてそろそろ俺は川神鉄心に会って話をしてくる」

そう言つて紫貴は今度こそ部屋を出て行つた

部屋に残された百代

「…まあいいさ、シキが私の弟になつただけで、まっ！あいつらがシキをほつとく訳がないしな」

そう言つて百代は紫貴を追いかけて部屋を出て行つた

その後、紫貴の腕に百代がしがみつき、

紫貴が抵抗するが、百代は姉弟はこういうものだ と

紫貴の抵抗も空しく、現在にいたる訳だ

「舎弟…モモ、それはあの直江と同じ…と取つてよいのかのう？」

「ああ、大和と同じ私の義弟だ」

とても嬉しそうに話す百代、本当に紫貴が弟になつた事が嬉しいようだ

ふむ…出会つて半日であのモモが舎弟にするほどの気に入りよう

…ひよつとして本当にモモにも春が来たか？だとすればめでたい

「川神鉄心」

「ホ！？」

孫娘の将来の事を考えていた鉄心、そこへ紫貴から声をかけられ素  
つ頓狂な声を出す鉄心

「…とりあえず、始めまして、俺が黒峰紫貴、黒峰師禅の遺言でここに来た」

とりあえず自己紹介を行う紫貴

「…あ、ああ、始めまして、紫貴君、ワシが川神院、総代、川神鉄心じゃ」

鉄心も紫貴の後に自己紹介を行う

「そして私が次期…それで…」ってシキ!?それはないだ」「愚姉?」…なんでもないです」

紫貴に素っ気ない態度をとられ、部屋の隅でいじける百代、

百代があしらわれていている事に茫然とする鉄心

そしてそれらを見捨てて話を続ける紫貴

「それで川神鉄心、話の前に確認したいことがあるのだが…」

紫貴の言葉に百代から意識を紫貴に戻す鉄心

「確認?なんじゃ?」

「それは…」

鉄心に話を始める紫貴、それはこれからの自分に必要な事のようにだ

## 6章 紫貴のその後（後書き）

ごめんなさい・・・

その言葉が作者の頭に流れました…

自分で読み返して

百代を見て

誰だ？コイツ？

そう思いました

前書きでも書きましたが

百代ファンの皆様

本当に申し訳ありません

7章 武神と武神 刹那の戦い(前書き)

やばい…

やっちゃった感が半端ないッス

## 7章 武神と武神 刹那の戦い

日は落ち、時間は夜に変わっていた  
川神院道場、そこは川神流を学ぶ川神院の門下生たちが普段、汗水を流し

己を高めようと技を磨き、心身を鍛える場である。

普段ならば大勢の門下生があり、門下生同士で切磋琢磨し合い、賑やかなこの場に、

今は4人の人間しか居なかった

川神鉄心、川神百代、黒峰紫貴、そして…

「いきなり、道場を使うために人払いを行うとはどういうことネ、師範？オマケにワタシまで残れなんていうカラ、他の門下生が不安に思ってたヨ？そしてその子は？」

川神院拳法師範代、ルーイー師範代である

「まあ落ち着けルー、彼は黒峰紫貴君とっての、黒峰師禅の…まあ孫のようなものじゃ」

鉄心がルーに紫貴の説明を行う

「黒峰師禅？あのワタシがまだ幼く、一門下生だった時にここによくきていた師範と互角だった、武帝、黒峰師禅ですかネ？」

あの人は強かった…師範と同じ師を持つだけはあるヨ

あの人は川神流ではなく、己の流派だったが…

あの人は学ぶ事が沢山あったネ、

…あれ？しかシ？あの人には配偶者がいなかったはず？どういう事ネ？」

ルーは昔の事を思い出して鉄心に聞く

「そうじゃその師禅じゃ、…まあ紫貴君は養子でのう」

鉄心がルーに説明をおこなう、そんな中、

「おいジジイ、そんなことより早く勝負を始めるぞ！」

胴着を着た百代が鉄心に向かって叫ぶ

「なんじゃモモ、その口のきき方は…あれほど言っておるのにお前という奴は…」

「うるさいジジイ、ならお前もモモと気安く言っなよ」  
百代と鉄心の口論が始まる

「ちよつと待つネ！？まさか師範と百代が今、戦う気ですかネ？ここが持たないヨ？」

二人の口論を止め、問いたただす

「あだからルーをここに残したのじゃ、時間も10秒でルーに結界と技が外に飛んだら止めてもらうためにのう、彼にワシと百代の実力を見せる事になつてのう」

鉄心がルーに仕事の説明をする

「ああ、ワタシが残された理由、ワカツタヨ」

ルーがガツクシと落ち込み、紫貴の前に移動する

「始めまして、紫貴君…だったネ？ワタシは川神院師範代、ルーイーだよ、よろしくネ」

そういつてルーが紫貴に握手を求め、右手を差し出す、しかし…

「……黒峰…紫貴…だ」

紫貴はそれだけいうと道場の隅に歩いて行ってしまった  
ルーは苦笑いをしながら差し出されたままの右手を見る

「…すまんのルー、あの子は少し複雑でのう」

鉄心がルーの隣へ移動する

「そうですか…いきなり嫌われたかと思つたヨ…しかし…」

ルーは真剣な顔になり

「彼は何者ネ？少しだけ、魔、の匂いがするヨ、少しだけネ」

「ふむ、流石ルーだの、気がついたか…彼の幼少時代に問題があつての、それが原因じゃ…彼が人との間に壁を作るのも、おそらくはそれが原因じゃの」

「フム、あれは治すのに時間がかかりそうネ、しかもかなり難しいヨ」

「ああ、わかつておる、その事も理由で今回、ワシとモモの勝負を

見せる事になったのじゃ、まあ詳しい話は後で二人きりの時に話す  
でな」

鉄心とルーは他の二人に聞こえないよう、小さい声で話す

「では始めるとするかの、モモやるぞい」

鉄心の声で百代が道場の隅にいる紫貴に一方的にベタベタするのを  
止め、鉄心のもとへ近づいてくる

「やっと話が終わったか、さっさと始めるぞ、ジジイ、すぐにくた  
ばるなよ?」

悪態をつく百代に鉄心が

「…舐めるなよ小娘が…まだまだお前に負けてやる気はないわ!」

鉄心の氣が高まり、それに気がついた百代も楽しそうに顔を笑わせる

「ハイハイ、そこまでネ!ではワタシが審判をさせてもらうヨ、

制限時間は10秒、本来ならワタシ一人では無理だが今回は他に人  
が居ないからいいネ、それ以上はワタシが持たない、では二人とも

準備はいいネ?」

「うむ」「ああ!」

「それでは尋常に…はじメ!」

合図と同時にルーの結界の中で二人の武神がぶつかり合う

いまさらだが、なぜ二人が戦うかというと、理由は少し前、百代と

紫貴が鉄心の部屋に来て、それぞれの自己紹介が終わった後まで戻る

「頼みたいこと?なんじゃ?」

鉄心にむかって紫貴がそう言いかける

「…俺は師禅から川神院の事…川神鉄心のことをよく聞かせていた、  
だから遺言通りここにきた…」

紫貴がボソボソと話始めた

「…師禅からは俺の今後を…川神鉄心の指示に従えと言われた…が、

俺は俺が認めた、人間の指示にしか従う気は…ない」

師貴の言葉に鉄心は眉を細めた

「…ん？まてよ…それは私の事をシキが認めたということだよな？」  
百代がとても嬉しそうに、その場で踊りそうな雰囲気です。紫貴に話かける

「……………」

「…あれ？な…なぜ…そこで黙る？」

紫貴が黙ってしまったので、動揺する百代

「それはつまり…ワシがお主にとって信用できる人間かどうか…というよりも、お主に指示を出したければ、お主を認めさせる…というところか？」

鉄心がそういうと場の空気が一段、重くなる

「…ああ、そう言う事だ…俺の考え方が気に入らなければ…今の場で追い出してもらってもかまわん」

紫貴がそう言うのと今度は百代が黙っていない

「！？ 待て！紫貴！…それは私が許さんぞ！ジジイ！！」

百代が鉄心に向かって叫ぶ

「…なぜ、百代が…怒る？」

百代が自分の事で祖父に食って掛かるのか理解できない紫貴

「お前は私の弟になったんだ、当然だろう？紫貴の事は気に入っているし、手放す気はないぞ」

百代は当然だろう？と胸の前で腕を組んで、紫貴に言う

「…理解不能だ…さっきあったばかりだろう？」

紫貴は百代の言葉でますます混乱し、百代に問う

「時間なんて関係ない、姉が弟を心配する、それが姉弟だろうが」  
なにを言っているんだ？と言わんばかりの百代

「…俺のことを全然知らないのに、なぜ俺を信用できる？」

百代の言葉に動揺し始める紫貴、百代は

「時間なんて関係ない、私の勘だ、それにこれからシキを知っていけばいい、時間もたっぷりとある」

「…姉弟、俺は…姉を持ったことがない…」  
「私が教える」

「…他の姉弟や…ましては他の家族すら見たことがないんだぞ？」

「かまわん！それも私が教えてやる！」

「俺は…化け物…だ」

「それがどうした？私も不良からよく言われる」

「……………」

「それにお前は化け物なんかじゃない…人よりも優れる、私の弟だ」  
「……………」

「お前を…私の弟であるシキを化け物なんていう奴は…これからは姉である私がぶつ飛ばしてやる、言葉通りにな」

反論する言葉がなくなった紫貴に、どうだ！！といわんばかりに笑顔を向ける百代

「……………ありがとう…ねえさん」

ぼそつと呟く紫貴

「…！？シキ！？いま…」

「ありがとう、と言ったんだ愚姉、こんな姉では今後は疲れそうだし…」

はあ…とため息をつく紫貴

「愚姉はやめろ！シキ！ほらお姉ちゃんと言え！」

「愚姉で十分だ」

「わかったから、なんでもいいから愚姉だけはやめてくれ」

二人のやり取りは知らない人が見れば間違いない姉弟に見えるだろう  
そして二人において行かれていた鉄心

「…ワシ、泣いちゃいそうだわい」

座り込んでいじけていた

「…気持ち悪い…」やめろ、ジジイ」

二人で鉄心に言う

「息ぴつたりだのう！？」

立ち上がる鉄心

「五月蠅い！ジジイ！…それよりもシキを追い出すのは私が許さんぞ」

話が戻った…

「勘違いするでない、そんな事最初から考えておらんわ、それにしても、よっぽど紫貴君が気に入ったようだのうもも、結婚するか？構わんぞ？別に…」

「／／／／ジ…ジジイ！？ポケたのか！なにふざけた事言ってる！／／／／」

ひゅん！と鉄心の所に飛んでいき殴りかかる百代

「凶星か！祖父の向かってなにをする！！」

百代の攻撃をガードし、反撃する

「黙れジジイ！黙らしてやる！」

「やってみる小娘！」

乱闘を始める二人、余波で部屋がめちゃくちゃになっっていく

その二人を見て紫貴は…

「……うん、それだ」

ピタッ！と止まる二人…

「…は？」

「…ん？」

なぜ、乱闘が止まったのか、理解できない紫貴

「シ…シキ…今、なんと？」

オドオドしながら聞く百代

「…ん？…うん、それだ…と」「…！？」

なにを言っている？と、きよんとする紫貴

「／／／／！？な、なななにをいつているんだ！？シキ！？まだ私たちは出会ったばかりで…いや、たしかに時間なんて関係ないとはいったが…あ、あああれは姉弟の話であってだな…いや、別にシキが嫌だというわけでは…／／／／」

顔を真っ赤にして混乱する百代

「そ…そうじゃぞ！紫貴君！そういうのは簡単に決めるのは…他に

もい人が沢山おるわけだし…」

百代と同じようにあたふたする鉄心

「なんだそれは！ジジイ！！お前が言っただらろうが！」

「黙れ！小娘、お前も否定しただらうが！」

また、乱闘を始める二人

「ベ…別に嫌というわけでは…それに姉としても、そこらへんの奴に大切な弟をあげられるか！シキは私のものだ！」

「アホか！どちらも百年早いわ！第一紫貴君は17歳…」

「なんだとジジイ！別にお互い卒業すれば…」

そこでまたピタツと止まる二人、

「そういえばシキ、高校には行っているのか？」

急に質問される紫貴

「いや…行っていない、というか、学校に行つた事がない…それよ  
り…」

辺りを見る紫貴、つられて二人も辺りを見る

「…いいのか？部屋…めちゃくちゃになつたぞ？」

紫貴の言うとおり、部屋はめちゃくちゃだ、とても人がいられる環境ではない

「…No！」

ムンクの叫びのような鉄心

「あーあ、さて、行くかシキ」

紫貴を連れて部屋から出て行くこととする百代

しかし…

「まてい、二人とも」

二人の襟首を掴む鉄心

「離せ！ジジイ！」

「だまれ、モモ！お前にも責任があるだらう！」

「……なんで俺まで？」

納得のいかない紫貴

二人は…

「（お前・お主）が原因だろうが！！！！」  
「？・？・？・？」

まったくわからない紫貴であった・・・

7章 武神と武神 刹那の戦い（後書き）

…あれ？

作者の中のオリ主像が

大きな音で崩れていきました…

…これ、もう人見知りじゃなくね？

8章 武神と武神 刹那の休息（前書き）

自首します・・・

## 8章 武神と武神 刹那の休息

ここは川神院総代、川神鉄心の部屋、川神鉄心と川神百代が乱闘の末、滅茶苦茶になった部屋を三人で掃除をしていた

「こ…こんなものかのう…」

とても疲れた様子の鉄心

「おー綺麗になったもんだ」

文句を言いつつも散らかった部屋を掃除した百代

「……」

特に疲れた様子もなく、ケロっとしている紫貴

「二人とも、お疲れじゃ、特にモモ、お主が最後まで掃除をすることは…正直、驚きじゃのう…始めは給料だせーだのふざけた事を言うておったのに…」

最後までしつかり掃除を行った百代に感心する鉄心

「うるさいジジイ、私も正直最初はやってられるかと思ってやめようかとも思ったが、弟のシキが文句一つ言わずに黙々と人の数倍働くんだ、それを見てサボれるか！」

「ふむ、まあそうじゃのう」

「正直、紫貴は速攻でサボると思っていたが…これは紫貴に対しての考えも改める必要があるそうじゃ…そして紫貴がおればモモもしつかり働く、本当にモモにはこの先、紫貴が必要不可欠になりそうだのう…」

そうなのである、部屋が荒れる切っ掛けにはなったが、本人の紫貴には自覚がなく部屋があれしたのは鉄心と百代が暴れたから、結果をみれば紫貴は掃除を行う必要がなかったのである。しかし、働けと一度言われると、文句一つ言わず、二人の倍以上の仕事は淡々とこなしたのである

「シキは掃除が上手だったなー、もしかしておまえ家事スキルめっちゃ高いんじゃないか？料理とかもできるのか？」

紫貴の家事スキルの高さ気づき、嬉しそうに紫貴に話かける

「……別に」

掃除を終え、黙って立っている紫貴

「また、元に戻ったか…ま、無視しなくなっただけマシか…」

はあとタメ息を吐く百代、しかし無視されなくなっただけ少しは嬉しそうだ

「……それよりも、さっきの続きだが…」

「「さっき？」」

紫貴の言葉に首を傾げる二人、そして二人は暴れる原因となった紫貴の言葉を思い出した

とたん又、顔を赤くし始める百代、

「ノノノノあつあれか…本気…なのか？…シキ？ノノノノ」

「う…ウム、そうじゃ、本気なのかね？紫貴君？」

さきほどまでよりかは落ち着いていた鉄心が紫貴に問いかける

「…ああ、百代の考えも理解したしな…だが…」

問題があるのか紫貴は黙ってしまう

「ノノノそうかシキが本気なら私も…ん？どうしたんだ？シキ」

百代も顔を赤らめていたが、紫貴が黙ってしまったのに気づき、真剣な顔になる

「…いや、俺は…今までだな…その…師禅としか…人と接したことがなくてな…」

紫貴の言葉に先ほどまで上がっていたテンションを下げた百代、鉄心も真剣になる

「い…今までって、あれか？…師禅さんの手紙にあったが…シキが師禅さんに…その、拾われた…時からか？」

ありえないだろ…と驚いている百代

「…そうだ…そして…最低限以外、敷地からでないようにしていたからな…」

「…それはまた…なぜじゃ？」

紫貴の言葉に首を傾げる鉄心

「…小さい頃からの習慣でな…他の人間が…自分が気を抜いたら、襲ってくるのではないかと思ってしまうてな…いや、今はありえないとは理解しているのだが…こればかりはな…」

紫貴の言葉ははつきり言ってしまうえば、自分以外は信用できないと言っている様なものだ…

物心ついた時に親に捨てられ、村人には遠ざけられ…襲われる

そんな日常生活を送れば人間不信になつても、いや、精神崩壊を起こしてもおかしくはない

「ふむ、師禅の手紙を読んだが…これは重症じゃな…人と会話できるのが不思議なぐらいじゃわい…」

鉄心は紫貴を見ながらそう考える

…しかし、鉄心が考えるよりも、紫貴の心の闇は深いのだが…今は知るよしもない…

「……」

百代も気がついたようである、紫貴の問題が自分の考えよりもかなり深い事に

「そんな俺が…見知らぬ土地に来て、いきなり家族ができた…まだ家族というものが理解できていく訳ではないが…これはわかる…今から俺が言う事が、二人には迷惑しかもたらさない事を…」

紫貴は居ずらそうな雰囲気である、鉄心と百代はなにを言えばいいのか言葉を探している感じだ…

「…百代…鉄心…俺なんかでいいのか？」

そんな中、ただ一言、紫貴はそう言った…

それを聞いた百代と鉄心は

「あたりまえだろ！お前は私の弟だ！お前の為ならなんでもしてやる！…これからはずっと一緒だ！」

紫貴を弟と思ひ…大切な者と思ひ…守りたい者と思ひ…男と認めたい百代

「ふむ…モモが君を弟と思うならばワシの孫じゃ…ワシの親友の孫替わりならばなおさらじゃ、ワシもできる事なら協力しよう」

鉄心も紫貴を家族と認めたようだ

「…ありがとう、ならば二人に頼みたい事があるんだ…これはさっきの二人を見てきめたのだが…」

さっきの二人の行動、それぞれは思い返し百代はまた顔を赤らめる  
「ノノノさっきのアレか…よし、私も覚悟を決めたぞ」

さっきの行動とは百代と鉄心がさっき、結婚するか？と鉄心が言い、百代が嫌いではない、などのやり取りをしながら照れ隠しで百代と鉄心が乱闘を行った事だろう

「…ワシもよいぞ」

鉄心も頭の中では紫貴と百代の結婚式を想像していた

「…百代と鉄心の本気の戦いを見たい…鉄心の实力を見たいのだ…怪我をした俺では鉄心と本気で戦えない…百代の实力ならある程度知っている、鉄心の実力が師禅と同じならば、俺も文句はない…」

紫貴は鉄心の部屋に来て言った、『師禅からは俺の今後を…川神鉄心の指示に従えと言われた…が、俺は俺が認めた、人間の指示にしか従う気はない』

この言葉の紫貴が鉄心を認める方法を提示した…しかし

「……………へ？」

紫貴の言葉の意味をしっかりと認識できない百代と鉄心

紫貴は二人を見て

「…やはり迷惑だろう？しかし俺には必要な事なのだが…」

紫貴は断られると思い、心なしかがっかりしている…しかし  
そもそもはなしが噛み合っていないのだ

「い…いや、それはいいんじゃない…後で道場で見せよう…し…紫貴君？質問なんじゃが…さっき、紫貴君はワシ等のやり取りを見て『うん…それだ』…そう言ったな？あれはもしかして…ワシらの殴り合いを見て…決めたのかのう？」

恐る恐る聞く鉄心、当然である、鉄心は紫貴は百代との結婚について肯定したものだと思っていたからだ

鉄心の言葉に意味を理解した百代がじいと紫貴をみた

「…？ああ、鉄心の实力を知るためにはどうしたらよいか…百代と戦っている鉄心を見て決めた」

紫貴の一言で場は凍る…

「……………」

「…？」

固まる百代と鉄心

現状を理解できない紫貴

「シ…シキ？私とジジイの話は聞いていただろう？」

百代は最後の希望にと紫貴に問う

「…ああ、あれは俺も戸惑った、何しろ初めての体験だったからな、あんなことを言われたのは…」

紫貴の言葉におお！と期待する百代、しかし…

「人を信用できない俺と違い…今日あった俺を信用すると言う百代…あれは尊敬…なのか？よくわからないが…百代は俺にないものを沢山もっていることがわかった」

紫貴に恋愛感情はない…それどころか恋愛感情というものを理解していなさそうだ

「私の覚悟は一体…？」

その場に崩れ落ちる百代

その百代を励ます鉄心

「…？」

まったく現状についていけない紫貴

「モモ？お前は何に對して落ち込んでおるのじゃ？…まさか本当に一目ぼ「そんなわけあるか！？」…」

鉄心の言葉を遮り叫ぶ百代

「私は強い者と戦いたいだけだ！まだ私にはそのようなものは必要ない！」

叫びながら暴れる百代

「わかった！わかったから暴れるな！モモ！せっかく掃除したのに！」

暴れる百代を止める鉄心

「……………」

これが家族か…と遠い目で見ている紫貴  
この状況はしばらく続いたのである

「…ん？そういえばなぜ私はすっかりしたのだ？シキは大和とはま  
ったく違うだろうし…」

今まではファミリー以外の男は強い者以外関心がなかった百代  
たしかに紫貴は強いだろう…

そしてこれからも戦いたいとは思っている…

しかし、ただ強いだけで舎弟に…弟にするであろうか…  
否、しないだろう…

大和を舎弟にした子ども時代とは違うのである…

けれど大和を舎弟にしたのは間違いではないと強く確信している…  
実際、現在の生活は面白い…

大和と一緒にいて良かったと思っっている…

しかし、紫貴を舎弟にしてまで

これからも一緒にいたいと思っっている…

紫貴と大和…

同じ舎弟で弟で大切な者…

しかし、紫貴と大和では違う感情を感じる…

これはなんなのか…

「わからない…答えがみつからない…」

大和にも感じない感情を持って混乱していた

「…まあいい…ゆっくりと見つけていくさ…」

百代がこの感情に気が付くことができるのか…

そして紫貴がこの感情を持つことができるのか…

それはまだ誰も知るよしはなかった…

## 8章 武神と武神 刹那の休息（後書き）

はい、やりました

確信犯です

毒を食らわば皿までも…です

壊れ始めたのならば

徹底的に壊してしまえ…

そう考え、罪を犯しました…

ま、謝罪はしませんけどね…

とりあえず

心を開いたのは百代だけです

鉄心はあくまで

家族として多少は…という感じです

家族だから信頼できる

そんな考えは甘いです

世の中では家族を信用できない方は沢山います

紫貴もです

はたして鉄心は

信用してもらえるのでしょうか？

次回に続く（笑）

・・・あ！作者は家族を信頼してますよ！

信用はしてないですけど…

9章 武神と武神 刹那の終わり(前書き)

忙しすぎる…

毎日書くのはさすがに無理です…

ルーの話し方が何気に一番難しい…

## 9章 武神と武神 刹那の終わり

あれから百代が正気に戻るまで少し時間がかかったとか…

そうして百代は紫貴に深く追求せず、鉄心もモモの心の中にできた感情を嬉しく思い成長するのを

見守るために、二人に追求はしなかった…

そうしてしばらくして、元に戻った鉄心と百代は、紫貴の頼みを聞くために

紫貴を連れて道場に向かったのである

そうして道場に入払いを行い、ルー師範代を交えて、鉄心と百代が試合を行う事になったのである

【長かった…作者は少し話を忘れかけていたね】

こうしてルーの審判のもと、制限時間10秒の勝負が始まったのである

「それでは尋常に…はじめ!!」

合図とともに二人の武神が動く

「いくぞモモ、気張るんじゃぞ」

「上等だ、ジジ…」**顕現の参・毘沙門天**「**ドン!**

百代の言葉が言い終わる前に、鉄心の奥義が発動する

0・001秒を切る神速の一撃、鉄心の闘気で具現化した毘沙門天

天から伸びる巨大な足で、百代は回避できずに踏み潰された

巻き起こった風が竜巻に変わる…それを…

「いきなりネ…フオオオオーッ!!」

ルーが気を発して解体し、風に戻していた

「ごほっ…久々に食らったな…」

「おお、潰れてなかったが、紫貴君が見ておるから張りきっちゃった」

…気持ちの悪い鉄心だった

「…ふざけたジジイだ、瞬間回復がなかったら、危なかったぞ…」  
瞬間回復、氣で細胞を活性化させ傷を一瞬で癒す百代

「…シキに無様な姿をさらせるか！次はこっちの番だ！」

「いやじゃ、顕現の言・摩利支天」

百代に攻撃させず、鉄心は闘気で、陽炎を神格化した摩利支天をだし陽炎をつくる

鉄心が陽炎の中に消えた

「ぐ…このコンボか！ジジイばかりシキに良い所を見せて！ずらいぞ！」

「ガハハ、悔しいか？普段より隙がデカイぞ！」

鉄心の技が続く

「終わりじゃ！零の顕現、天之御中主！」

「しまった！大爆発では間に合わん！川神流、人間爆弾！」 ドカ  
ン！！

百代は自爆技を使い、陽炎だけではなく、鉄心も吹っ飛ばした

「ぐおっ！そこで自爆技を使うか…せつかくの隙をのう…紫貴君に良い所を見せられんかったわい」

その隙に百代は瞬間回復で傷を癒した

「黙れジジイ！私にも見せ場をよこせ！川神流、無双正拳突き！」

「いやじゃい！無双正拳突き！」

拳と拳がぶつかりあう、しかし鉄心が力負けをして吹き飛ばされる  
「むう！若さはずるいのう」

「ハハア！シキに認められるのは私だけで十分だ！」

「ふざけるでないわ、九の顕現、天津甕星！」

「ふざけていない！川神流、星砕き！！」

超スピードで落下してきた隕石を百代はエネルギー砲で撃ち砕く

「そこまでネ！！10秒たったヨ！！」

ルーの叫ぶが響く…しかし

「隙あり！無双正拳突き！」

「させるか！川神流奥義、無双正拳突き！」

二人は止まらない、お互いを攻撃しようと接近し合う

「くっ！駄目ネ！止まらないヨ！結界も百代の星砕きで吹き飛んでしまったしネ！」

ここはワタシのストリウム光弾で…ン？」

二人に割って入ろうと構えるルーの隣に人影が写る

「…毘沙門天」

ドン と百代と鉄心の間に鉄心の毘沙門天よりも小さい足が出てきて、床を割る

「…小さい、思ったより難しいな…これ」

まじまじと自分の手を眺める紫貴

「…「……………へ？」」

すつとんきような声を出す鉄心と百代とルー

当然である、今日初めて川神院にきた紫貴が、小さいとはいってもまだ師範代であるルーにも、天才といわれた百代にもできない川神流の奥義である

顕現の参・毘沙門天を使ったのだ、場の空気が止まる

「い…今、紫貴君が…やったののか？」

恐る恐る聞く鉄心、当然である、自分が何十年かけて習得した奥義を今日初めて見た子が使ったのだ

「…！？シ…シキ？お前、その体…」

続いて何かに気がついた百代が紫貴を指さす

「…ん？まだおかしな所があつたか？」

そう言つて紫貴は両腕を軽く回し、自分の背中を見ようとして、その場でぐるりと回る

「い…いや、シキ…傷は？」

百代が顔をひきつったまま尋ねる

…そう、ないのだ、傷が…

朝、門の前で百代と戦い

ボロボロになつた体と折れているはずの紫貴の腕が

何事もなかったように完治していた…

「…ああ、これが…百代の瞬間回復だ…これもなかなか難しくくて治るのに時間がかかったが…」

そういつて紫貴はグルグルと折れていた腕をまわし始める

「あ…ありえん…これもあの眼の力なのか？」

「どういう事だ？シキも瞬間回復が使えたのか？」

「どうということネ？頭が混乱してきたヨ？」

混乱する三人

「…落ち着いて、説明するから…」

そういつて紫貴は皆に話そうと決意をする…

自分の瞳…破幻の瞳と…過去の自分の事、師禅に拾われてから今までの事を…

9章 武神と武神 刹那の終わり(後書き)

難しいよ

次回から過去編かな…多分…

10章 子鬼と武帝 過去 其の壱(前書き)

紫貫の過去の話です  
ツッコミ所満載ですが  
大目に見て下さい…

## 10章 子鬼と武帝 過去 其の壱

「だから言っただろ？俺は化け物だつて…」

百代と鉄心の試合の後、一目みただけで技を使ってみせた紫貴

天才…もはやそんな言葉ではかたづけられない

人が汗水を流し、習得したものを一目見ただけで真似し、習得してしまう

その人物の努力を否定してしまうものだ

人が持てる才能の領域をあつさりと超えてしまっている才能…

人間離れをしている才能を人は鬼才という

「俺の過去を話そう…人に言うのは初めてだ…」

紫貴はその場にあぐらをかいて座った

それを見た百代と鉄心とルー

三人も紫貴の前に座った

「………」

そこに言葉はなかった…

鉄心は師禅の手紙である程度は知っていたが

紫貴の言葉を黙って聞くことにした…

「…どのように話せばいいのかな…」

紫貴は昔を思いだすように目を瞑りながら話し始めた

自分の存在、自分がいた村のこと、師禅の事、

………才能のこと…

人の領域を超える才能：鬼才

それプラス天賦の才を超える肉体能力…

そんなものを生まれた時から持っているのだ

一般人と同じように暮らせるわけがない

世の中には『十で神童、十五で才子、二十歳過ぎれば只の人』とい

う言葉がある

これは幼少のころは神童、秀才、天才と言われてもその才にあぐらをかき、努力を怠ると

大人になったときには只の一般人になっていたり

幼少の頃から努力を続けてきた才能のなかったものに抜かされるのである

武術にはそれがある

努力は才能を凌駕する

それが武道であり人間である

幼少から天才、神童と言われた百代も現在まで修行を行い

努力をしてきたから現在の力があるのである

しかし、黒峰紫貴、彼は違った

自我が芽生えた時には神童と言われた者や天才と言われる人間をあっさりと超えていた

そこに彼の意志は関係ない

武帝と言われた黒峰師禅に多少は鍛えられたとは言っても

それは最低限、紫貴が力を暴走させないよう、師禅が施したものである

幼少からなにもしなくても

紫貴が望まなくても

その才能は衰えるところかむしろ強まっていたのである

そんな紫貴を周りは受け止めたりはしない

憎・恨・怒・忌・呪・怨・殺・滅…

紫貴を憎しみ、恨み、怒り、忌み、呪い、怨み、殺し滅しようとする…

彼とて人なのである

いくら才能があり、天賦の才を凌駕した存在でも心はそうはいかない

自我が芽生え、幼少の紫貴の周りは全員敵…

幼い子どもにありとあらゆる負の感情が襲い掛かる…

無事ですむわけがなかった…

そこにいるだけで疎まれ、恐れられ、攻撃される…

信じたものは皆、紫貴を利用するか…殺そうとするものだけ…

精神が崩壊するのにそう時間がかからなかった

幼い紫貴にできる事、それは人間から逃げるか…

心に壁を作り、他を信用しないことだ…

視界に入るものを疑い、自分が使うものを疑い、口に入るものを疑

い、自分自身を…疑った…

そんな生活を紫貴は何年も続けた、一人でずっと…

しかしそんな生活を子ども一人で続けるには限界があった…

肉体的にも…精神的にもだ

五歳の頃、村人に不意に襲われ致命傷を負った…

この頃の紫貴にはもう人間的な考えは不可能であった

喜怒哀楽は著しく欠落し、なぜ自分が生きているのかもわからなく

なっていた…

紫貴はすべてを捨てた、生きること…

村人から逃げ、村人が近づかない村はずれで紫貴はすべてを諦めた…

傷の手当をせず、食べ物も飲み物も取らなかった…

紫貴はその場から動かず自分の死を待った

それが何日も続いた、村人も気味が悪いと紫貴に近づくことがな

った

普通の子どもならばとっくに死んでいるだろう…

だがしかし、紫貴は生きていた

衰弱しきっており、言葉も発せないほどに弱りきっていたがそれで

も生きていた…

一般人の数倍あり、強靱的とも言える回復力で傷から血は止まり

水分も食べ物も取っていなかったが生きていた

かろうじて生きていた

だがそれも時間の問題であった

…ああ、やつと終わる…

紫貴はそう思いながら意識を手放した…

しかしそれでも紫貴は死ねなかった  
目が覚めてしまった…

そこは死後の世界でも三途の川のほとりでも賽の河原でもなく  
見知らぬ部屋の…布団の中であつた

「…ここは…どこだ？」

目が覚めた紫貴はまず現状の確認を行った…

「…！？…手当をされている？」

紫貴は自分の体を見て、傷に包帯が巻かれていることに気がついた  
紫貴はふらふらながらもその場に立ち上がり、周りを確認する  
「なぜ、手当をされている？村の人間に俺を殺そうとする奴はいて  
も、助ける奴はいないはずだ」

紫貴は五歳とは思えない思考回路で頭を働かせる…

「気が付いたようだ…だがまだ寝ておれ、傷はほぼ癒えておつた  
がお主、何日も食事をしていなかったらどう？体が衰弱しきつてお  
つたぞ？」

ふいに背後から声がして、紫貴は振り返りながら飛びのく

そこには白髪頭で白い髭を伸ばした見知らぬ老人がお盆を持って立  
つていた

「驚かせたかな、まあいい…お主なかなかの武の才を持っておるな、  
その歳でなかなかのものだ」

老人はそう言うくと布団の隣にあるテーブルに手に持っていたお盆を  
置いた

そこにはコップに入った水と…粥が置いてあつた

「食べ、お主が寝ているときに水分と栄養剤を飲ましましたが…そのま  
までは死んでしまうぞ？」

老人の『寝ている時に飲ませた』その発言を聞き、紫貴は自分の喉  
を片手で掴み、不審な顔をした  
その姿をみた老人は

「…なに、別にお主をどうとする気はない…なにかする気なら寝ている時にしているし、…殺す気なら助けんだろ？それよりもほれ、食べ」

そう言つて老人は粥を指さす

「……」

だが紫貴は食べない…それ以前に老人に近づこうとはしなかった

「…警戒しておるのか…その歳でいつたい…？」

とても子どもとは思えない警戒のしかたをする紫貴に老人は目を細めた…

「まあいい詳しい話はこれを食べた後だ…ほれ、毒なんて入っておらんぞ？」

そう言つて老人は水を一口、粥を一口食べた…

「少ししたらまた来る、しっかり食べるんだぞ？」

そういつて老人は部屋の入口に歩いて行つた

「…隣の部屋におる、なにかあつたら呼びなさい」

老人は歩きながらそう言つた

部屋の入口の戸を開けて老人は振り向いた

「…そういえばまだ名乗つておらんかったの、私は黒峰師禅、今は旅人だ」

そう言つて師禅は部屋から出ていった

「……」

師禅が出て行つてからしばらくして紫貴はテーブルの前に移動した

「……」

そこには食事が置いてあつた

粥とはいえ初めてともいえる他の人間が作った料理である

「……」

紫貴は警戒しながらテーブルの前に座り、粥をスプーンですくい、匂いを嗅いだ

「……」

そして紫貴は粥を一口…舐めた

そこからは紫貴は考えるのを止めた  
粥に凄い勢いで食らいつき…

ひたすら食べた

凄い勢いで…

涙をながしながら…

お椀を担いでひたすら食らった

その間も涙は止まらなかった

だが…

「……………うまい、だがこれは？」

紫貴は涙をぬぐって頭を傾げた

「まあいいか……………」

そういつて紫貴はまた粥を食らい始めた

紫貴は涙というものを知らなかった…

毎日が生きるのに必死で

涙をながしている余裕などなかったからだ…

「食べたか…」

小さな声で呟くと師禅は戸の傍から離れ椅子に座った

「それにしてもあの子ども…何者だ？」

自分の前から飛びのいたあの動き

ただの子どもの動きではなかった

「あんな子はみたことがない、村人は鬼の子と言っていたが…」

ここは村から少し離れた空き家である

とは言っても山の中にある

村の間も昔は狩りの時に休憩するために使っていたが

今は使われておらず、師禅旅の途中に数日前から村人に借りている

家である

師禅が野暮用で村へいったらあの子が倒れていた

瀕死の重体であった

村の人間に聞いても『殺せ、それは鬼だ』

それしか返ってこなかった

師禅は素早く家に連れていき、手当を行った

「それにあの紫色の瞳…少し魔の匂いがするな…」

師禅は紫貴の瞳を思い出す、アメシストの宝石のような綺麗な目であった

「紫色の瞳を持つ鬼で紫鬼【シキ】か…ふん、どこが鬼だ、天賦の才が著しく高い只の子どもではないか…」

師禅はそう呟きながら紫貴がいる部屋の戸を見た

「村人は鬼だと叫んでいたが…はたして鬼を作り出したのは一体誰なのか…」

ふう、と息をはき背もたれによしかかる師禅

「さて、あの子をこれからどうするか…村にはもうおれまい、それにあの警戒の仕方、あの目…なんにも信じていない…いや、信じられないという目だ、一般の施設では手に負えまい…どうするか…」

師禅は紫貴のこれからを考えていた…

これが黒峰師禅と黒峰紫貴の出会いであった…

10章 子鬼と武帝 過去 其の壱（後書き）

ここに書かれているのは

作者の勝手な知識と解釈です

これからも続くと思います

意味がまるつきり違う…

そういう場合は指摘して下さると幸いです

作者の勝手な解釈の下、万が一

不快な思いをした方がありましたら

ここに、深くお詫び申し上げます

11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳(前書き)

紫貫の過去はどこまで考えようかな・・・  
結構、人の会話を文にするのは難しいな・・・

## 11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳

「さて…」

師禅は紫貴のいる隣の部屋に向かった、戸を開け…

「そろそろ食べお…」

部屋に入った師禅が見たものはスプーンを握ったままテーブルに伏せて眠っている紫貴の姿だった

「…すーすー」

「…寝ておるのか…まあ無理もない…」

衰弱死しかけていたのだ、当然である

師禅は紫貴を布団で寝かせようと紫貴に近づいた

紫貴の肩に手を置こうとして…

「すー…すー…！？」

突然紫貴の目が見開くように開き師禅に向かって手にもったスプーンを突き立てた！

スプーンが師禅に刺さる前に師禅は紫貴の肩に置こうとした手でスプーンを掴んだ

「ハアハアハア…？」

条件反射に近い状態で目覚めた紫貴、現状が理解できないのか肩で息をしながら黙って師禅を見ていた…

「…落ち着け、いきなり触ろうとしたのは謝罪しよう…お主を布団で寝かせようとしただけだ…」

師禅はスプーンを離し、紫貴から少し離れた

「……………だ？」

「…ん？」

「俺を助けてどうするつもりだ？…なにをたくらんでる？」

紫貴はスプーンを構えながら師禅を睨み付ける

「別になにもたくらんでおらんよ、お主に少し興味があるだけだ…

お主、名は？」

師禅の言葉に嘘は感じられず、紫貴はスプーンを構えるのを止めた  
「…よいのか？嘘かもしれんぞ？」

師禅の言葉に紫貴は首を横に振った

「…相手の顔を見れば嘘かどうかは理解できる…できなければ死んでいた」

紫貴はこれまでの日常生活で相手が嘘をついているかどうかを判別できるようになっていた

「…ここまでか…とても子どもとは思えん…じつに面白い」

師禅はますます紫貴に興味を持っていた

「そうか…その歳でなかなかのものだ…して、名前は？」

師禅はもう一度名前を尋ねた

「…シキ」

「…なに？」

「俺に名前なんてない…村の人間は俺の事を『シキ、オニ、バケモノ、オニゴ』と言っていた…だから俺の名前はシキだ…どうせ呼ぶ奴もいないしな…」

「……両親…親はどうした？」

「…親？」

「…いや、なんでもない…」

「…ここまで、酷いか…」

師禅は紫貴と話していく内に少しでも紫貴の内面を感じ取っていた…

「…よし、私がお主に名前を与えよう」

師禅の言葉で茫然とする紫貴

「…必要無い…呼ぶ奴もいないし…」

紫貴の言葉で師禅は小さな笑みを浮かべ

「必要さ…私これからお主の名を呼ぶのだから…」

師禅の言葉に驚き、言葉を発せない紫貴

師禅は懐から紙とペンをだした

そしてなにかを書くとき紫貴に渡した

「お主の名だ…今から真正銘、これをなのがいい…」

「必要ないと思うが…」

そう言いながらも紫貴は若干嬉しそうであった  
紙を受け取った紫貴は紙を見た

紙には、黒峰 紫貴、そう書いてあった

「……………」

…さっきの若干嬉しそうな表情は消え紫貴はまた無表情になっていた

「…不満かね？」

師禅は紫貴の表情を見て不満があるものだと思い、紫貴に尋ねた…

「……………読めない」

「……………は？」

師禅は紫貴がなにを言っているのか理解できなかった

「…俺、字…読めない…」

気づいた時からサバイバル生活を行っていた紫貴である

いくら歳相応に見えず大人びて見えても五歳の子ども

オマケに誰からもなにも学ぶ事ができず

生きるために必要な事は

独学と

見様見真似で行っていた

字なんて学ぶ事が出来なかった…

「…お主の名前は、クロミネ シキ、だ…」

静かに師禅は紫貴に名前を告げた…

「黒峰…紫貴…俺の…名前…」

紫貴は紙の文字を見ながら確かめるように名前を反復する…

「…くろみね？」

紫貴は？を出しながら師禅を見た

「…ああ、私の姓名と同じ、黒峰だ…嫌かね？」

「……………」

紫貴は師禅の言葉に否定も肯定もしなかった…

「まあいい…私はお前を…紫貴を拘束する気はない…私の傍にいる  
ことが嫌になればいつでも、なにも告げずに居なくなってもかまわ

ない。私は追いかけないし、探さない」

師禅は紫貴を見ながらゆつくりと告げていく

「…だが、紫貴がここにいる間は私の家族だ…私も身内がいなくてね…紫貴、お主が嫌と言うまで一緒に暮らさないか？」

師禅の言葉に紫貴は固まる…

「…なぜ、コイツは俺を怖がらない？攻撃してこない？…畏か？…しかしコイツは嘘を言っていない…本気で言っている？家族？なぜ？コイツになんのメリットがある？…理解できない…わからない…」  
「どうだね？もちろん紫貴が知りたい事は私が知っている限り全部教えよう…」

字、学問、雑学、娯楽、社会の事、一般常識、武術、全部だ」

紫貴は混乱する

人間は信用できない…

信じたら騙される…

人間は他を利用する生き物だ…

…俺は化け物だ、皆言っている

…こいつはなぜ俺に関わろうとする

…知りたい

一度は死んだ身だ

…試してみるか…

「…すぐには決められない、お前の事も信用できない…」

「…ゆつくりと考えなさい」

「…一つだけ…いいか？」

「…なんだね？」

「化け物…怪物と言われた俺が…ここにいても…いいのか？」

紫貴は恐る恐る師禅に尋ねた

「…お主の事はあらかた村の連中から聞いておる」

紫貴の体がビクツと震える

「…本来、怪物とは『正体のわからない、不気味な生き物、また性質・行動・力量などが人並外れた人物』のことを言う、たしかに紫

貴の正体はわからない…紫貴本人にもわかっていないのだから…性質も行動力も力量も人並み外れている…とても歳相応の子どもには見えない…」

紫貴の顔は青ざめ初め、下を見ている

「ただ…」

紫貴は顔をあげた

「それがどうした？正体がわからない？ならば知ればいいだろう？すべてが人並み以上？そんな奴は世界には沢山いる…ようはそれを自分の意志でコントロールできるかだ、できないものが世間では怪物と言われている、そして…」

師禅は紫貴を指さす

「怪物？誰も教えなかったのだから知らなくて当然だ、人が知らないものを知る方法は大きく分けて三つ、学ぶか気付くか教わるか、だ…ならば私が教えよう」

紫貴は無言で下を向いていた

そんな紫貴の頭に師禅は手を置いた

紫貴はビクリと反応したが逃げなかった

「…私がどこまでできるかはわからん、だが私の持てる力を持って…」

…紫貴は涙を流していた

涙の存在も正体も名前すらわからないのに…

「紫貴を人間にしてみせよう…」

老人の手の下で小さな子どもはずっと泣き続けた…

紫貴が初めて自分以外の者と関わりを持つ事ができた日である…

11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳（後書き）

はい、ご都合主義な展開です

よく考えたら紫貴・・・

実際にはまだ戦ってないな・・・

12章 紫貴と武帝 過去 其の参(前書き)

いつまで続くんだろう・・・

## 12章 紫貴と武帝 過去 其の参

あれから数日がたった・・・

すぐに師禅に学を学ぼうとした紫貴だったが

師禅の「とりあえずなにかをする前にまずは体を休めてからだな」

という言葉に従い、

弱り切った体を休め、食事をしっかりと取った

そしてまともに体が動くようになったのを確認した紫貴は師禅の下  
に向かった

それから紫貴は師禅に文字を教わる事にした

師禅は

「私の事や自分の体の事は知りたいとは思わなかったのか？」

師禅の言葉に紫貴は

「…自分の体の事はおいおい自分で知ればいい…師禅の事は自分の  
目で見て知っていく…俺は自分の目で見たものしか信じない…だか  
ら字だ、文字を知らなくては読めない、知ることができない…知っ  
ているぞ？本というものは読めば知識が手に入るのだろう？」

紫貴の言葉に師禅は笑みを浮かべる

「まあたしかに…紫貴の言う通りだ…時間はたっぷりとあるし、本  
人の言葉よりも自分で見たほうが納得できるだろう…字か…たしか  
に本などの文章を知ることが知識を学ぶのにはいいかもしれん、知  
っていれば後は自分で学べるからな…」

そうして紫貴は師禅に字を学んだ

最初はひらがな

これを間違えて知ってしまうとすべてが狂う

師禅は紫貴に付きつきりで教えた

紫貴には驚異的な学習能力があった

基本、学んだ事はほとんど忘れない

『紫貴が知ろうとするものは、である』

紫貴はひらがなの文字をひたすら読んだ

そして書き写した

ひらがなを覚えた後はカタカナである

紫貴はこれをひらがなの半分の時間で学んだ

恐ろしいまでの集中力でほぼ一日中机に向かっていた

師禅は

「驚異的な学習能力だな…まだ数日しかたっておらんのに…明日になってひらがな、カタカナを完璧に覚えていたなら…次にいつても良いかもしれん」

「紫貴、私は少し出かけてくる」

「あ、ア、い、イ……」

師禅の言葉に紫貴は反応せず復唱しながら文字を書き続けていた

「聞こえていないのか、反応する必要があると取ったか…」

師禅は少し落ち込みながら建物を出ていった

そうしてしばらくして師禅が返ってきてても紫貴は師禅が出て行く前のままの姿で

同じように学習を行っていた

師禅は苦笑いをしていた

「これ紫貴、少しは休め、時間は沢山あるだろう？」

師禅の言葉に紫貴はピタリと手を止めた

「俺はすぐにも本を読みたい…疲れたら自分で休息をとるさ」

とても五歳児には見えない

「そうか…しかし紫貴、そろそろ夕飯にするぞ…続きはその後でいいだろう？」

師禅の言葉に紫貴は

「…今書いているのが最後までいったら終わる…」

そう言って紫貴はまた書き始めた

「…やれやれ」

師禅は夕飯の支度に向かった

「…それにしても凄まじい集中力だ…欠片も残さず吸収してやるといった感じだな」

そういつた感じで次の日には紫貴はひらがな、カタカナの読み書きは完璧に身に着けていた

「…これで本を読めるのか？」

紫貴は師禅の前で問う

「…ほれ」

師禅は一冊の本を紫貴に渡した…

紫貴は本を開き…

「…」

本を閉じた

「で、どうする？」

師禅の問いに紫貴は

「…このひらがなでもカタカナでもないのはなんだ？」

「…それは漢字だ…昔の本ではむしろ漢字のほうが多い…」

「…ではこの漢字を知りたい」

紫貴の答えに師禅は

「まあ落ち着け、ふむ、どうするか…お主ぐらいの歳では漢字はまだ早い気もするのだが…」

紫貴はまだ五歳、本来なら外で遊び、絵本を読むような歳だちなみに紫貴の歳も師禅が五歳と決めた

正式な歳がわからないので

名前をもらった日を誕生日にし、歳は師禅が村人に

紫貴の生い立ちを聞いたのだ

その時ある程度紫貴の生い立ちを知ったのだが

それはまたの機会にしよう…

「これを紫貴にわたそう…本来ならこんな教え方はしないのだが…お主なら大丈夫だろう」

そういつて師禅はさっきとは違う本を紫貴に渡した

かなり厚い本である

「…これは？」

「漢字の辞典だ、そこに漢字が書いてある…他にも色々あるぞ」  
師禅は他に、沢山の辞典を出した

小学漢字・小学国語・小学漢和・類語…

「こっちはまだ早いだろうが…まあ好きに読み、わからない事があつたら私に聞きにおいて…時間は沢山あるんだ、ゆつくりやるんだぞ？世の中にはまだまだ…実際に見ないとわからないことが沢山ある…見てもわからない事もな…世界は広いのだから…」

紫貴と師禅が共に過ごし始めて早くも一年がたった

その間に紫貴が師禅の下から去る事はなかった

紫貴は師禅から沢山の事を学んだ…

読み、書き、そろばん…

沢山の本を読み沢山の事を学んだが…

紫貴は基本、外に出たがらなかった

外に出て山に行く事はあつても村には、人里には行かなかった

だからこの一年、紫貴が会話を行ったのは師禅だけだ

師禅も悩んだが、紫貴に強制はしたくなく

紫貴の望む通りにした

そんなある日…

「紫貴」

師禅の言葉で本から目を離れた紫貴が師禅の近くにやってくる

「…なに？」

紫貴が近くに来た事を確認した師禅が話始める

「紫貴、お主と共にいて一年がたった…どうだ？私を信じる事ができたか？」

いきなりの質問に戸惑いを見せる紫貴

「…いきなりだな…信用も信頼も尊敬もしている…」

紫貴の答えに満足した師禅は話始める

「実はな…初めて紫貴と出会った時に話をしたが…私は旅人だ…」

「!？」

師禅の言葉にある程度なにかを感じ取った紫貴

「…もともとここには数カ月だけいるつもりだった…お主と出会い、時間を忘れていたが…そろそろここを離れようと思う…」

「……………」

紫貴は黙った師禅の言葉を聞いていた

「そこで紫貴、お主に決めてもらう…これからの事を…」

「……………」

「…私はお主を家族と…孫のように考えている…だからお主が決めるのだ、私と来るか…ここに残るかを…」

「……………」

「…明日、答えをもらう、村にはいられないだろう…しかし、ここから少し離れた町には施設というものがある、お主のように親がない者を養う場所だ…ゆっくりと考えなさい」

そう言っつて師禅は部屋を出ていった

「……………」

紫貴は無言のまま、立っていた

そうして次の日…

師禅と紫貴は部屋にいた

「…答えをもらおう、紫貴」

師禅の問いに紫貴は

「俺は師禅と一緒にいたい…他の人間は怖い…答えは最初から決まっていた…だが」

紫貴は師禅を見る

「…俺のような怪物が…一緒に…師禅といていいのか？」

紫貴の問いに師禅は笑みを浮かべた



図鑑も読んだ

山に行き、川に行き、

山や川の生き物を見て知った

植物、昆虫、動物、魚、果物、野菜…

太陽の事、月の事、星の事

時間の事、季節の事、

沢山の事を学び、気付き、教わった

師禅に…

山に…

川に…

自然に…

沢山の事を学んだ紫貴、まだまだ学ぶ事が沢山あり

それを知ることが紫貴にとっての楽しみであり生きがいになりつつ

あった

そんな紫貴であったが

武術だけは学ぼうとしなかった

師禅は武術の達人であった

本人曰く、『引退した只のしいさんだ』らしいのだが

それでも世界でトップレベルだ

紫貴は知らないが…

家には武術に関する本が沢山あった

でも紫貴は読まなかった

なぜか…

師禅が言ったように怖いと思ったのだ

たしかに紫貴は怖いと思った

力を手にするのが…

だが…

「…それもあった」

紫貴ははなしだす

「…なにか他に理由があるのかな？」

師禅の問いに頷く紫貴

「怖いと思っただき、力を手にするのが…けれどそれ以上に…」  
師禅を見る紫貴

「師禅が俺を恐れ、怪異を見る目で俺を見ると思っるのが怖かった…」  
紫貴の答えに眉を細める師禅

「…私が紫貴を…?」

紫貴が何を言っているのかいまいちわからない師禅

「…一度だけ武術の本を読んだ事があった」  
そっぴいなながら紫貴は部屋の壁に近づいていく

「それには氣の事が書かれていた」

紫貴は壁の前にたった

「俺は喜んで知ろうとした、氣の存在、感じ方、どういつ働きをするのか、コントロールの仕方…」

左手で壁を触り、右手を握り振り振りかぶった

「…そして、試した」

紫貴はゆっくりと軽く壁を…殴った

バキッ

「そして知った…これは子どもが出来ていいものではない」  
壁には穴が開いていた

木で作られた壁に小さく、

…子どもの腕ぐらいの大きさの穴が

「…だが、それができた俺はやっぱり…」

穴を見つめる紫貴

「化け物だ」

本を読んで氣の事を理解した紫貴

一般人では氣を認識するのも難しい

武人でも氣を認識してからコントロールし、使えるようになるのはかなりの時間と努力が必要だ

それができた者が、長い時間練習して技として使える

紫貴はやった

氣を認識しコントロールして

腕を氣で強化し

壁に穴を開けた

六歳の子どもがだ

紫貴は師禅を見た

「これでも俺は化け物ではないというのか？」

紫貴は師禅に問う

「.....」

チヨイチヨイ

師禅は紫貴に手招きをしていた

「？」

紫貴は師禅の横まで近づいた

「てい！」　バシッ

「！？がっ」

師禅は紫貴のおでこにデコピンをした

それだけなのに...

紫貴は吹っ飛んだ

ゴロゴロと転がる紫貴

「ぐお...」

おでこを抑えて悶える紫貴

「阿呆が、武術に関わろうとしないのは私が恐れるからだ？」

師禅の言葉に反応する紫貴

「俺が愚かだと！？本で読んだぞ！氣は武術の基本で、これは暴発、

暴走する可能性が高いと！」

おでこを抑えながら師禅をにらむ紫貴

「だから私が教えると言っておいただろう？なぜ聞かない、私が紫

貴を恐れる？ありえんわ」

師禅は紫貴と同じように構えた

ただ違うのは壁まで2〜3メートルはあるということだ

「これぐらいできてから言うがいい！」

師禅は拳を突いた  
凄まじい力で

突風が吹き、拳から氣を纏った一撃が飛び壁にあたった

ドカン!!

風が止み、紫貴を見ると壁には2メートルぐらいの穴が開いていた

「紫貴……」

その言葉に茫然と壁を見ていた紫貴が師禅を見た

「どうだ？私が恐ろしいか？」

師禅の言葉に紫貴は首を振る

「……なぜ？」

紫貴は理解できない

「普通の人間には……ましてはこんな老いぼれにはこんな事はできん

……だが紫貴は恐れない……それは普段の私を知っているからであろう

？」

師禅の言葉に啞然とする紫貴

「紫貴の事はこの一年、ずっと見て知ってきたつもりだ、そんなこ

とでは恐れん」

師禅の言葉に紫貴はふっと笑った

「……ではこれからは氣の事を教えてくれるか？」

これからも……

それはこれからも紫貴は師禅の傍にいたいということだ

「……よかるう、実際に氣は危険だからな、しっかりと教えてやるう」

「……お手柔らかに」

「逃がさんからな？」

師禅の言葉に紫貴は

「……まあこれからもよろしく」

そういつて紫貴は壁を見る

そこには小、大の穴が開いていた

その間に

「……こうして」

紫貴は師禅が構えた通りに構える

「・・・こうか」

紫貴は師禅と同じように拳を突いた

ドン！

紫貴の拳から氣を纏った一撃が飛び出し壁にあたった

そこには1メートルぐらいの穴が開いていた

「・・・小さいな」

紫貴は師禅を見る

「しっかり教えてもらおう」

「・・・私の技か？・・・見ただけでか・・・骨が折れそうだ」

「逃がさんからな？」

こうしてこれからも紫貴は師禅と一緒に居ることを選んだ

紫貴が人を初めて信じた日でもあった

「ところで師禅・・・」

「・・・なんだ？」

旅の支度を始めようとした師禅が振り向く

「ここは借りていた家なのだろう？」

紫貴は壁を指さす

そこには大、中、小の穴が開いており

そこからは外から朝日の光が綺麗に差し込んでいた

「・・・いいのか？あれ？」

「・・・」

師禅は固まる

「本で読んだぞ、人の物を壊したら弁償しなくてはいけないのだろ

う？器物破損等罪、俺は金を持ってないぞ？」

紫貴の言葉に

「・・・紫貴！急いで支度だ！出来次第出るぞ！」

師禅は凄く速さで部屋を出て行った

「・・・おい、逃げたら罪になるのだろう？犯罪者は捕まるって本に・・・」

紫貴も師禅に続いて部屋を出て行った

「なんでそんなに詳しいのだ！」

「師禅が前に酒で酔って持ってきた刑法典の本に載っていた、たしか刑法第261条で過失犯もつく、他人の所有物を損壊するなどして、その価値を減少・滅失させる罪だ、三年以下の懲役、または30万円以下の罰金・・・」

「喧しい！早く支度しろ！！」

酒は止めよう

そう思った師禅であった

12章 紫貴と武帝 過去 其の参(後書き)

ごめんなさい

作者にはまったく知識はないです

インターネットは便利ですね(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0019z/>

---

真剣で幻が通る道

2011年12月10日17時55分発行